

戦争を知らない世代へ ⑮ 東京編

炎に焼かれた父と母

娘達が記録する東京大空襲

創価学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ ⑮ 東京編

炎に焼かれた父と母

娘達が記録する東京大空襲

朝陽学会青年部反戦出版委員会

第三文明社

戦争を知らない世代へ⑮

炎に焼かれた父と母—娘達が記録する東京大空襲

昭和51年 3 月 9 日 初版第1刷発行

編 者 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 栗生一郎

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

電話東京(294)8731(代) 振替口座東京117823

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 株式会社 星 共 社

©1976 printed in Japan 0036—7015—4438

発刊に寄せて

戦後すでに三十年が経過し、「戦後は終わった」、「いや、戦後はまだ依然として続いている」などといった議論が展開されている昨今ですが、私たちの祖父母や父母たちが体験したあの終戦の日の屈辱感、虚脱感、そして複雑な心境の入り混った一種の安堵感は、様々な形で語り伝えられてきていると思います。しかし、その反面、厳しく言えば、形ばかりの平和に酔い痴れて、危機意識を感じさせない若い人たちの層が増えていることも否定できない事実だと思います。もちろん、いたずらに危機意識を煽るようなことは、慎しまなければなりません、先輩たちの苛酷な体験を決して無にしてはならないというのが私たちの訴えたいところでもあります。

事実、世界の各所で戦火がくすぶり続け、多くのかけがえのない人々が犠牲になっております。そして、さらに言えば全人類が無惨な死を遂げなければならない大戦争が起こらないという保証は、どこにもないのです。唯一の被爆国日本に課せられた使命は極めて大きいと言わなければなりません。戦争体験の継承ということは、大変難しい問題を孕んでおりますが、無為に看過できない、というより私たち自身の問題として取り組まなければならない課題であると思います。

今回の出版は、私たちと同じ世代と、青春期を戦火の中に過ごした父母や祖父母たちとの対話

の中から生まれた、反戦出版シリーズの一冊です。特に、一夜のうちに東京を焼土と化した、大空襲下における貴重な証言を集め、まとめたものです。この取材の途上で、戦無派と総称される私たちは、何度も身の震える思いをしたことを付け加えておきたいと思います。

本来、女性は平和を愛するものであり、平和の象徴とも言われてきました。子供を産み育て、無限の可能性を生み出していく女性の立場は、それ自体が人間社会にとって普遍的な重要性をもっていると考えられます。祖母から母に、母から娘にと語り伝えられていくように、多くの人の生命を奪い、社会を崩壊させた東京大空襲の現実を、記録として留めることは、新しい世代の人ひとりのうちに、反戦、平和への砦を強固に築く発条になることを確信したいと思います。

台東区の女子部が、毎日の仕事と日常活動のなかから時間をつくり出し、まとめあげたこの一冊。つたないかもしれませんが、彼女たちの平和を願う熱き心をくみとっていただくことができれば、これほどの喜びはありません。

昭和五十一年二月

創価学会青年部

東京女子部長 笠貫ななみ

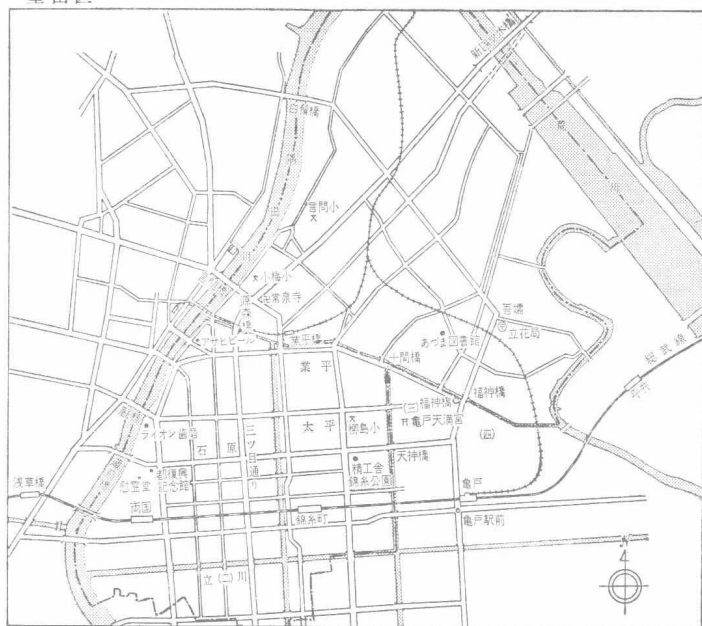
目次

発刊に寄せて	目黒ミキ	8
戦争に追いつめられた生活	中野イキ	12
清島小学校への避難	中野晴雄	16
生き残った母と私	清水フジ	20
言問橋を最初に渡った私	面来シン	25
生きていた主人	守山カツ	33
空襲後の苦難	柳金太郎・とし	41
夫婦で逃げた後楽園	石平貫一	48
書くのも辛い思い出	瀬沼スイ	53
火の海を上野の山へ	渡辺義徳	57
田中小学校の校長代理として	青木五郎	61
報われざる日々		

生き残ったのは私ひとり	鈴木 茂	65
なんで罪のない人間までを	永井徹治	69
主人と別れて逃げた大空襲	永井とき	77
東京下町の壊滅	太田金太郎	84
倒錯の大日本帝国	早川国雄	91
召集と空襲に明け暮れて	森田末雄	105
肘で押した乳母車	森田かずみ	117
空襲後の生地獄	樫村正直	125
三月十二日の浅草・亀戸	加藤定巳	132
軍国主義の根は深く	高木美津	139
マネキンのように死んだ人	能勢小石	143
巨大なB 29に失った自信	名古屋政吉	147
空襲の二日後に行った浅草	田沼フミ	158
軍に蹂躪されて	田中菊太郎	161
渡り鳥のような生活	矢口リヨ	166

大空襲を夫婦で語る……………	藤岡猛・静由	172
とにかく嬉しかった終戦の日……………	森 政雄	179
空爆の恐怖……………	稲垣 鉦	189
岡山へ逃げよう……………	磯川その	193
「陸軍記念日」へ向けての空襲……………	白 沢 進	197
老いた父母を亡くした夜……………	三反崎きん	204
とうとう血を吐いた私……………	宇田川キミ	209
炭になった人々……………	松川 繁雄	220
あとがき……………		

墨田区



炎に焼かれた父と母――娘達が記録する東京大空襲

戦争に追いつめられた生活



目黒 ミキ（明治24年8月生）

戦争のためにどんどん税金が重くなって、吉原に店を持っていましたけれど税金で追いたられるんで、とてもじゃないが商売ができない。番頭さんも、いい番頭さんは徴用でとられてしまう。いくらお客さんと呼ばばよいと言ったって、番頭でする商売だから残っている人は役にたかない。どうしようもなくなり、「ここでよしちやおう」と、店をやめてしまった。二万五千円くらいで家が建った時ですから、月にどうにか食べるだけなら二百円で生活はできる。とは言っても、何をするったって内職があるわけじゃない。

私は親一人子ひとりでしたけれど、その子供が待乳山小学校の四年生で仙台へ学童疎開してしまつて、私一人が残つて生活していました。防火訓練ということでバケツリレーなんかをやっていました。なにしろその時分の私の歳は五十を越えてましたから、訓練にはあまり参加しなかった。

待乳の公園の園丁さんとは懇意にしまして、配給の物資などは、「あんた食べなさいよ」と言って私が分けてあげ、あっちからは薪なんか貰ったりで良く面倒みてもらいましたよ。子供がいなくて私ひとりなのに。その上、更年期の時から耳が遠くて警報が鳴っても聞こえないのです。ある時などはその園丁さんが飛んで来てくれて、布団とか家具とか全部出してくれました。それから、私は馬鹿だネ、園丁さんの家の台所にあるコンクリートの流しの所で、お尻を出したまま頭だけ突っ込んだ格好をして隠れてたんですよ。頭上では飛行機が飛んでるらしかったですが、とにかく恐かった。

警報が鳴ったからといって、園丁さんにしても毎回くるわけにはいきませんから、普段は押入れを取っばらっしてしまい地面に藁わらを敷き、その上に布団を敷いて、防空上、戸、障子は取り払うように指導されていたので、上からはゴザを吊ってそこから表の様子を見ていたものです。すると人が騒いでいるような様子が見えて、ブーブーと警報が鳴っているなと思うわけ。それでも、私は身体が弱くて避難訓練の際にしたって人に手を引いてもらうくらいでしたから、「どうなるうと私の運命だから仕方がない。私は大てい駄目だろう」と思っていました。

空襲の時は待乳山小学校の地下へ避難することに決まっており、三月九日の大空襲の時、私はどうにかそこへ入ったけれど、そこも危ないというので道路の脇の水道管があった近く、その防空壕へ逃げました。壕には畳がかぶせてあって、私は重い畳を全力で上げながら入ったもので

す。運良く助かったわけですが自分の家はみんな焼いてしまった。新潟県の私の田舎へ送って置いてた着物くらいは何とか助かりましたが……。

空襲が終って今度は生活がどうしようもないので、子供——私の子供は赤ん坊の時養子にももらったのですけれど、その子の実家が長野県にあり、そこへ親戚の者と一緒に行きました。それで、焼跡に立て札を立ててもらいました。立て札に私の行き先を書いたわけです。これは後から聞いたんですが、私の安否を氣にかけて焼跡に尋ねてくれた人が、「ああ無事だったんだな」って安心したというんです。他人には良くしておくもんです。あんな時に、なんだかんだ尋ねてもらうなんて、ああいう時は人の情けや氣持がよく分るもんです。私はその焼跡から別れる時に、長年住んだ所を離れるわけですから、ひとりでに胸がいっぱいになっちゃって、二度とここへ来れるだろうかって、ただそれだけでした。

そして、長野でやっかいになりましたが、そう長いあいだ面倒かけてもいられませんから私の実家の新潟へ帰りました。やがて随分と時間が経ってから再び東京へ出てきて上板橋へ行ったところ甥が、「おやじの困った時にいろいろ世話になったから」と言って、畳から薪から全部持ってきてくれました。でも、ここにもそう長くはおれなかった。そしたら田舎にいた息子が「お母さんと、どんな小さな犬小屋みたいな所でも構わないから一緒に住みたい」って言うわけ。「僕も学校を卒業したら東京へ行くよ」と——。「お前がそこまで言うのなら」と私も思い、田中町の

知人を頼って行ってみました。「いつ来ても結構です。それに実費だったら二ヶ月か三ヶ月で家が建ちます」と、その知人は良い返事をしてくれました。で、私は皆様のいろいろな人情に助けられながら息子とまた一緒に生活するようになったのです。あの戦争当時、耳が遠くて身体の弱い、しかも一人暮らしの私が、死ぬこともなく生き抜いてこれたのも全て皆さんの親切があったからだと思っています。

戦争で生活がじりじり追いつめられていった私のようなものにとって、人々の人情は本当に身にしみて有難かった。今では息子とも別々に暮していますが、良いあんばいに皆さんが親切にくれるから、有難いと心から感謝しております。

清島小学校への避難



中野 イキ（明治27年9月生）

あの三月九日は晴れていました。風のものすごく強い日で、そうですね十五メートルくらいでしたかしら……。そして大変に寒い日でした。当時は清島町に住んでいまして、息子が四人おりましたけれど、長男（後出の中野晴雄氏）だけが残って、あとの三人は戦地へ行っていました。必ず生きて帰って来ることを祈っていました。でも二人の息子を亡くしました。その連絡に当たって終戦になってからのことです。それは本当に辛いことでした。戦争は私の大事な息子の生命を奪ってしまったのです。どんなことがあろうとも戦争だけはもう嫌です。

三月九日の空襲は、たしか夜の十時半を過ぎた頃だったです。とにかく着の身着のままで近くの清島小学校へ避難したんです。学校までどこをどうして行ったかは覚えておりません。なにしろ必死でした。外は風が強かったから恐ろしくて歩けない程でした。大きな毛布が火のついたまま飛んでいたのです。清島町の大通りは焦げた衣服やら板切れが上野駅方向へどんどん飛ばされ

ていました。まったくすごい風でした。火の手の回りが早かったのも当然です。小学校の講堂の中は避難してきた人達でいっぱいでした。私達は二日間ですが学校にありました。

食べる物は全くありませんでした。小さな子供を連れていた人は大変でした。可哀相で見られません。子供がお腹をすかして泣いていても何もしてあげられないですから――。同じに、私もその時何も食べなかったんです。とにかく、恐ろしいという気持ちでいっぱいでしたから、お腹のすいていることは全然気にもなりませんでした。学校には責任者らしき人がいて、皆をよく指導していたようです。そして、寝るといってもそれどころじゃないんです。避難してきた人がいっぱいでしたから、少しばかり持ってきた自分の荷物を枕のかわりにしたりして、ウトウトとしたりします。空襲警報のサイレンは鳴り続けているし、とにかく落ちつかない夜を過しました。寒さと恐ろしさと不安な気持ち、あれはどうしようもありません。空襲がおさまっても学校からはおいそれと出られませんでした。結局、清島小学校へ逃げ込んだ人は全員が助かったのです。本当に良かったです。死んだ人がいなかったという学校は数少ないと聞いています。どこへ逃げても必ず何人かは死んでしまったんですから。

あくる日、三月十日ですが、空襲が終っても自分の家はどうなっているのかと見に行く気持ちもあります。すぐに田舎へ行くことにして、取るものも取りあえず仕度したものです。あの空襲直後の有様といったら、私達が小学校にいた間にとんでもないことが起っていたんだと驚

いてしまいました。戦争は本当に嫌です、なにしろ地獄そのものです。あの光景を今思い出しただけでゾッとします。死んだ人が山になってるんです。防空壕の中にしまっておいたお米が一晩で炊き上がっていたくらいです。それも、乾パンのようにカチカチになってしまった。防空壕の中へ火は全然入らなかったのに、まわりの熱が大変なものだったのでしょうか。もしその中へ逃げ込んでいたら助かるどころか蒸し焼きになっていました。それで、真黒になったお米を薪のかわりに使いました。食べられませんでしたから――。

電車は動いてないし、田舎へ行くといっても遠くまで歩いて行きました。でも、京成は走っていました。道には着物のボロボロに焦げた人や火傷した人などがゾロゾロと、おねり、みたいに駅へ駅へと向っていました。あの時の大通りの様相こそ地獄絵図って言うのでしょうか。惨めな姿の人達が手を引かれたり、せおわれたりして歩いてるわけです。私にしたって、何も人のことばかり見ていたのではなく、本当に必死でした。あの思いは経験した人でなければ分らないと思います。ペタンコの下駄なんか履いて、生きるために、死にたくないという思いで、ただそのことだけ、その思いだけで必死だったのです。まったく思ひ出すのも嫌なくらいです。私の知り合いの中に三月九日の大空襲の二日前に胃の手術を受けた人がいて、可哀相なものでした。助けてあげたい、手伝いに行つてあげたいと思つても行くこともできなかった。自分の生きることだけで必死でした。本当にどうしようもなかったのです。それでも私には田舎があつたからまだ良かったんです。